

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 279 回 すべての指導者に望む、「報徳」の心！

2008.10.12

サブプライムローン問題から派生したリーマンショック、世界中を巻き込む金融危機の嵐は、その勢いを収めることなく、果てしない不安と苦悩を蔓延させている。我国経済に及ぼす影響も計り知れないものがあり、その解決策を誰一人見出すことができないでいる。いや、正確に言うと、策はあるが実行できないでいると言った方がいいかもしれない。なぜ、そうになってしまうのか？今回は具体的経済対策論ではなく、もっと、根本的な原点に戻って考えてみた。

あまりにも短期間で辞めた、どこかの大臣がいたが、小生、あれほど極端ではないにしろ、現代人が抱える「苦悩」は、無責任な政治と教育から生まれたものだと思っている。その結果、政治も経済の分野も、混乱の收拾ができないまま、国民に苦境を押し付けている。それは多分、真に愛情と責任ある指導者がいなくなってしまったことに起因する。

我国には昔から「勤、儉、譲こそ富者の道」という考え方があった。これは二宮尊徳の報徳思想で、指導者たる人の道を説いたものである。リーダーは「勤、儉、譲」の一つでも欠けてはならない。「勤」とは、衣食住になるべき物品を算出する事である。「儉」とは産出した物品をむやみに費やさないこと。「譲」とは衣食住の3つを他に及ぼすことを言う。この「譲」には色々ある。今年のを来年のために蓄えるのも「譲」、また子孫に譲るのと親戚、友人に譲るのも、郷里や国に譲るのも、それぞれ状況に応じて行う「譲」である。

財貨は世の中に嵐のように満ち満ちているが、今日のを明日に譲れば富貴・栄誉に至る、それが「譲道」であり、イコール「人道」である。多く譲れば多く返ってくるのが、天理である。世の中で富者が、みんな足ることを知らずに、飽くまで利をむさぼり、不足を唱え続けた結果が、实体经济からかけ離れマネーゲームに翻弄された、この金融危機になっている。

譲って損はなく、奪って得はない。国や家が貧窮に陥るのは、分内の財を散らしてしまうからである。これを散らさないようにさえすれば、国も家も必ず繁栄を保つことができる。そのためには「分度」をわかまえることが重要である。分度とは、自分が置かれた立場や状況を踏まえ、それに見合った生活をする。そのためには自分の収入に応じた生活基準（国の場合は予算計画）を定め、その範囲の中で生活するよう節約に心がけるということである。二宮尊徳は、これを「分度を立てる」と言っている。

1年の気温は寒暑があり、昼夜の長さは長短がある。国には盛衰があり、家には貧富があり、作物にも豊凶がある。寒暑、長短を平均すれば春分、秋分の節となるように、盛衰、貧富、豊凶を平均すれば中正自然の数を作りことができる。この中正自然の数に基づいて、国や家の分度を立てる。これこそ土台であり、これを守れば国も家も衰廃窮乏の恐れはない。これが「報徳を行う方法の根本」である、と二宮尊徳は述べている。世界中の、各界の、全ての指導者に、今こそ言いたい！「報徳」の心...と思うのは小生だけか？

（石川佐智子著「世界に誇る日本の道徳力・心に響く二宮尊徳90の名言」コスモトゥーワン刊）